

Title	人生の意義及び価値 (第二回) : ルードルフ、オイケン教授の新人生観
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.3 (1909. 10) ,p.231(1)- 242(12)
JaLC DOI	10.14991/001.19091001-0001
Abstract	
Notes	論説 巻頭の巻号(誤植) : 1巻6号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19091001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原稿ハ凡テ左ニ宛テ御送附被下度候

市内麻布區狸穴町四十一番地

星野勉三

事務上ノ一切ハ

市内芝區三田二丁目慶應義塾内

三田學會

ニ宛テ御送附被下度候

雜誌ノ御注文ハ凡テ發賣所へ宛テ御申

込被下度候

原稿ノメ切期日ハ毎月十日トス

定價 一冊金貳拾錢 郵税金貳錢
十二冊金貳圓四拾錢 郵税金共
郵券代用一割増

明治四十二年九月二十六日印刷
同 四十二年十月一日發行

發行兼編輯人 神戶彌作
東京市麻布區新堀町七番地

印刷人 中島丑之助
東京市京橋區宗十郎町十五番地

印刷所 會社東京國文社
東京市京橋區宗十郎町十五番地

東京市芝區三田慶應義塾内

發行所 三田學會
發賣所 粗山書店

東京京橋區築地二丁目
振替貯金東京二四一七

取次店

東京堂、有斐閣、上田屋、至誠堂、北
隆館、東海堂、良明堂（京都）東枝、
寶文館（大阪）盛文館、杉本、（九
州）菊竹（臺灣）新堂高（清國）濱井

三田學會雜誌 第一卷第六號

論 說

人生の意義及び價值 (第二回) 川 合 貞 一

(ルードルフ、オイケン教授の新人生觀)

一 社會主義の人生觀

社會主義の人生觀は屢自然主義の人生觀と混和融合して一體を爲す所のもの
其の根本的確信に於いては互に相補ふが如く思はるゝ程多くの近似したる點を
有してゐるのであるが完成した上に於いては全く別の性質別の生活情緒を現し
て來るのである蓋し自然主義では自然に對する關係が生活を支配するのに社會
主義では同胞に對する關係が生活を支配するのである即ち自然主義では主とし
て無限の自然の中に人間を入れて了うと云ふのであるが社會主義では人間社會

人生の意義及び價值

を首位に置き而してこれに新しき形を與へやうとするのである従つて前者に在つては認識が主となり後者に在つては行爲が主となつて來るのである。現代に於いて人をして經驗の地盤に立つて相結合するに至らしめた動機は種々ある宗教は最早以前の如く各人に確固たる安住の地を與へず自然も科學的研究の進むに従つて内的には益々吾人と遠ざかれるに至れるより人は共同生活によつて孤獨の感を免れんとするに至つたのである其の上近時共同生活なるものが超絶界との關係を離れて其れ自身の中に己れの目的を見出すこととなつて來たと共に工藝の進歩發達は人と人とを接近せしめ互に相影響する所あるに至らしめたのであるかくて一般的の意見努力が容易に形成せらるゝこととなり個人の上一方ならぬ影響を及ぼすこととなつた従つて社會なるものが生活に向つて大なる價值を有することとなつて來たのである。

而して近世社會學は個人が社會的環境に依屬することの通常考へらるゝよりも大なることを示し個人は遺傳教育環境の影響を受けて個人となるのだと教ゆるに至つたさう云ふ所から一般社會なるものが認識の主要問題となり實際政治的

保護の主要任務となるに至つたのであるかくて生活の内的變化が起つて個人の功過とも其の責任を社會に歸することとなり施いては一般社會の状態を物質的に精神的に高上せしめやうと云ふやうな努力となつて現はるゝこととなつたのであるそれと同時に國家の生活が内容形式共に變化して中世に於いては教會に委ねられて了つて居た内的陶冶の問題を自分の手に收めることとなり個人は政治的有機體の一員に過ぎずして其の任務も其の力も共にそれより受取るものと云ふやうな古代の考へ方が復活し得るに至つたのであるこれに加へるに近代に於いては國民的精神が勃興し各特色を發揮して國民的生存競争場裡に勝を占めやうとすることとなりた是に於てかまた社會が個人に先つこととなり個人に對して甘んじて服従すべきを要求するに至つたのである。

3 かう云ふ關係は工藝の進歩發達の結果到る處に巨大なる組織が起つて來て個人は其の鍵鎖中の一環に過ぎず之を離れては個人の勤勞は其の價值を失ふやうになつた所から殊に強めらるゝに至つたのである斯くの如く何事も懸つて全體に在りとするると全體の形成が主として勤勞の成功不成功人生の幸不幸を決するも

4
 のとなつて來るのは勿論のことである然らば全體の形成に關する問題が最も深く人の心情を盪すのも敢て怪むには足らぬ云ふ迄もなく今日の社會に於いて物質的生活の維持及び其の高上の問題が最も込入つた八ヶ間敷問題なのである蓋し近時生活の物質的方面が一般に未曾有の價值を得て來た所から勤勞の問題が其の頂點に達したのである世の中を見ると一方に於いては富の非常なる集積があり又一方には勤勞の集積があつてそれが全然反對の關係に立つて人間の全存在を危くするやうに思はれるかゝる場合に方つて根本的變革の考が起つて來ればそれが人心を收攬して全存在高上の希望を起さしめ心情を盪すのも無理からぬことゝ云はねばならぬ

かくて社會の形成があらゆる文化作業の中心問題となり特有なる社會的生活を生ずるに至る即ち人生の心核を共同生活に置いてそれから全存在を新たに形成せやうとするこれが近代人に行き直れる一般の傾向である而かも此の傾向たるや史的に考察すると近世の初頭以來種々の方面に現はれた個人尊重の反動なのである即ち個人の尊重が其弊を生じた所から重きを社會に置いて之を救はんと

5
 するに至つたのである蓋し從來の社會に於ては唯少數の人のみ生活の資料文化の財寶に充分關與することが出來たばかりであつて多數は殆んどこれに與らなかつたのである従つて之を平等に分配せやう杯と云ふことは餘り考へられなかつたのである所がこれに反對の運動が起り多數民衆が幸福を要求するのみならず精神的高上を要求するに至つた而してこれが益々力を得て全社會の要求となつたのである是に於てか唯個人の心情に由つてのみならず制度と立法とに由つて貧者弱者を救濟し高上せんとする者を扶け起し物質的並に精神的財寶を可成的直接に何人の手にも入るやうにせやうと云ふのが現代社會の理想となつて來たのである惟ふに斯くの如き理想が力を得るに至つたのは唯正義の上から丈けではなく是に由つて全文化に力を與へ之を新にせやうと云ふ考へからであるがかゝる努力も人生を直接的存在に限つて了うと云ふ實證的な時代の特色の影響を受けて偏狹に陥り頗る疑はしいものとなつて來たのであるかくて社會と云へば多數民衆のことゝなり創造の代りに民衆の需用が人生の主なる動力となつたのである所が民衆に取つては物質的生活維持の問題換言すれば經濟的存在

6
の問題が先に立つ所からこれさへ解決すれば人生の幸福精神の高上が保證せられるものと思はれるやうになつたそこで從來の生活の秩序から云へば極低いものであつた所の物質的のものが新しい關係に於いては主なるものとなり而してあらゆる力の發展に導くものと考へらるゝに至つたのである

かくて社會的生活なるものが問題となつて來るのであるが然かし吾々の全存在に於ける社會の位置はこれによつて高められ直接的存在が思想を支配するやうになつて社會的秩序は一層の強固を得たのである而して社會の狀態があらゆる努力の出發點にしてまた終極點となり總てが經驗の地盤に据えらるゝことゝなつたそこで科學は事物の隠れたる深みを開くものではなくして人をして現實の上を力を得せしめ醒覺せる活動的生活に導くもの藝術は人をして理想の世界に悠遊せしむるものではなくして經驗の中に於いて存在の苦を和らげ人生に純潔なる樂を與へるもの道徳は吾々の行爲をして見るべからざる秩序に従はせるものではなくして共存同衆の感情を發展せしめ社會との内的結合を堅くするものであると考へらるゝに至つたのである而してこの孰れに於いても一般的のもの

が個人的のものに先だち科學が人間の主なる研究としてゐる所の人間は主として社會的のものとして取扱はれ藝術は從來のやうに個人の行動經驗を描寫するものではなくして社會の狀態を描寫するが其の任務となつた而してあらゆる實行的活動に於けるが如く一般狀態を改善するが教育の主なる目的となつたのである

斯くの如く全體に重きを置くやうになつたのは其の中に一つの確信が存してゐるからである此の確信は無論言ひ顯されてゐることは稀であるが隱約の間いづれの處にも働いてゐるのである并は何んであるかと云ふと個人が結合して全體を爲すと理性の總和が出来て來ると云ふ信仰であるかゝる信仰があつてこそ始めて民衆が個人よりも立優つてゐると云ふことを立證することが出来るのである社會に於いては善が勝利を得るの望あることを立證することが出来るのである

要するにこの總てが相結んで今吾々の眼前に見るやう特有なる社會的文化を生じて來てそれが益々成長しつゝあるのである

8
が此の社會的文化には一つの限界が存してゐる而して开は個人と社會との關係を考へると自づから明白になつて來るのである若し社會的文化を以つて唯一なる文化であるとする個人は自づからの努力活動を全く環境に對する關係に費して了はなければならぬことになる而して社會に對して獨立せる範圍優越せる權利を保持することが出來ないことになるのである然かし世界の歴史を調べて見るに個人が全然社會に隸屬し家族や種族の一員として習慣傳説等に支配せられたのは唯文化の初頭生活關係が極めて單純なる時代に於いてのみであつて其れより進んでは個人は益々獨立と自由とを得一層進んでは傳來の秩序に疑を挿み結局社會全體に對して反抗するやうにもなるのであるさうなると己が思惟が生活の主なる立場となりあらゆる事物の尺度となるのであるかくて傳來のものは何でも破壊するやうになつて來るのであるが然かし決して破壊する丈けに止まるものではなく個人が獨立を得るに従ひ文化生活は益々深くなり行き宗教は始めて眞の信仰に達し藝術上の創造は人の全精神を傾注せしめ在來の考とは變つた特有なる科學的思想が發展するやうになるかくて人生の全體が獨立と運

動と深さとを得るのである若し個人が其の獨立を保持することが出來ぬとなると文化の大なる發展は到底望む可からざることとなつて了うのである茲に社會主義的的人生觀に對する難點をかいつまんで擧げると
(一)此の人生觀によると行爲の動機は社會的實利である社會に及ぼす影響である然かしそれでは財寶の分配には差支ないが其の生産には不充分である一體精神的創造と云ふものは内的強制の下に行はるゝもので他人に及ぼす影響を考へて出來るものではない蓋しかの天才なるものは創造せざるを得ない内的強制を感じて創造するそれで立派なものが出來て來るのである然るに行爲の動機を社會的實利に置くとなると何より先に社會に及ぼす影響を考へるやうになるそれで如何にして立派なものが出來て來やう況んや民衆の間に分配することのみ考へてゐるに於てをやである

9
(二)此の人生觀では社會の判斷を以つて眞理の尺度となし個人は全然これに服従すべきものとしてゐるこれは前にも述べた通り民衆に理性の總和が存してゐると云ふ考から來てゐるのであるが果してさうであらうか一體眞理と云ふもの

10

が現はれて来るのは殆んど常に少数者の間に於いてあるかの嚴密な意義で云ふ所の社會主義ですらもカール・マルクス杯と云ふ少數の人の力で出来上つたものなのではないか民衆は無論先件となり環境となることが出来るには相違ないが創造の支持者となることは出来ないものである

(三) 此の人生觀では可成的安逸な歡樂多き存在と云ふものが最高目的となつて来るのであるが然かしあらゆる苦痛あらゆる心配を取り去つた人生は空虚と感ぜられあらゆる心配あらゆる苦痛よりも堪へ難きものとなりはしないであらうか無論生存競争の爲めに日々逐はれてゐるやうな者にはそれが最高財寶とも評價されやうが精神的發展を希求する者には決してさうではない要するに人間に特有なるものを捨て、其努力を低き階段に引下げそれで以て人生を幸福ならしめやうと云ふことは愚なる企であると云はなければならぬ

(四) 此の人生觀では生活の條件を根本的に改善しさへすれば文化が絶へず進歩し人間が高上するものと豫期してゐるのであるが加ふる樂觀説は決して現實の狀態に適中するものではない

以上の諸點は明かに社會的文化の局限せられてゐることを示しかゝる文化を主張する人の矛盾を示してゐる一體社會的文化と云ふものは人間を驅つて外的生活に入れて了つて精神の内的生活と云ふやうなものを認めずあらゆる關係を唯外部より導き出さうとするのである無論人生の内的獨立を覓めると云ふやうな努力には多くの迷謬を伴ふてゐるには相違ないが然かしさう云ふ要求が起り多くの運動を喚起するのを見ると人間は唯社會的有機體の一員に止まるものでないと云ふことを知ることが出来るのである

嚴密な意義で云ふ社會主義的運動經濟的革命的な要求が起つて來た當時には一般の文化を發展せしめて人間の高上を謀からうと云ふ希望が其の有力なる動力として存してゐたのであるがそれが漸々權力と快樂と民衆の要求となり劇しき階級間の争闘利害關係の争闘と變じて人間を内的に高上せしめる杯と云ふことは見ることが出来なくなつたのである要するに社會的文化が前進するに従つて豊富なる内的文化との關聯を絶ち單に己が力にのみ依頼することとなつて來た従つて全人生を包含することが不可能となり人生に解決を與へやうと云ふ當の

都市と人物發生との關係

田 中 一 貞

13 余は嘗て本誌に於て、人物發生に對する自然界の勢力なる論文を掲げて人物の發生は自然的の勢力例へば氣候風土地勢人種等に依りて左右せらるゝこと一般に想像せらるゝが如く然かく大なるものにあらずして寧ろ社會的勢力個人的努力は其最も有力なる原因なることを説けり。但し是は重に消極的に自然力の案外に有力ならざるとを述べたる迄にして積極的に人力の至大なることを證せるものにあらざりき。故に余は本論に於て都市的生活と人物發生との關係を説き如何に社交は社會の智能を啓き個人の性格に貢獻する處大なるかを論せんと欲す。思ふにニユートン氏運動の第一法則靜止の體は常に靜止に安んじ運動の體は常に等動を以て直線進行すとは獨り物質界に於て眞理なるのみならず、社會上精神上亦此原則の行はれざるなく吾人の人格の如きも刺戟なき時は常に靜止の状態に止